

受動喫煙(間接喫煙)の有害性について

て、副流煙のpHは8〜9(強アルカリ)。アルカリ性が強いほど、生体への刺激が強く、吸収率は高くなります。

《受動喫煙の有害性》

- ① 低体重児、先天奇形、未熟児
ニコチンと一酸化炭素は胎盤を通じて胎児の体内に入るため胎児は低酸素状態となり、発育障害と低知能児となる可能性があります。
- ② 乳幼児突然死症候群
(SIDS)
胎生期から新生児期の受動喫煙に基づく呼吸中枢の発育障害によるといわれています。妊婦の喫煙はSIDSの危険度を1.8〜2.5倍高めます。出生以後の受動喫煙は家庭内での1日の喫煙本数の総和に比例して高くなります。

タバコ由来のニコチンが証明され、疫学調査と併せて受動喫煙が子宮癌の危険度を高めることがわかります。

- ⑤ 虚血性心疾患
非喫煙者も軽度喫煙者と同じように心臓の運動耐用能が落ち、非喫煙者の心筋梗塞を30%高め、常時受動喫煙にさらされている非喫煙女性で心筋梗塞の発生率が91%高まります。
- ⑥ 膀胱癌、副鼻腔癌も受動喫煙で明らかに増加します。
環境タバコ煙は空気と同じくらの比重であるため、ほぼ同じ高さの辺りにかなり長時間漂っています。したがって、家族を始め喫煙者の周囲の人々は、自分の意思とは関係なく、有害な煙にさらされ「受動喫煙」を余儀なくされているのです。

(医師会)

平成15年、健康増進法が施行され、多数の者が利用する施設で受動喫煙を防止する措置をとらなければいけなくなり、同時に、厚生省が、「職場における喫煙対策のためのガイドライン」を改定し、受動喫煙対策が徹底されることになりました。これは近年、受動喫煙の害が明らかになってきたためです。

《タバコの煙》

タバコの煙には、喫煙者が吸い込む《主流煙》と、火のついた部分から出る《副流煙》、喫煙者が一旦吸い込んで再び吐き出す《呼出煙》があり、副流煙と呼出煙をあわせて環境タバコ煙といえます。4000種以上の化学物質が含まれ、200種類以上は有害物質、発癌物質は30〜40種類あります。ニコチン、タール、一酸化炭素は特に悪影響のある3大有害物質とされ

ています。

- ニコチン：強い毒性と習慣性をもたらし、血管を収縮させ高血圧をきたし、コレステロールを増加させます。
- タール：数多くの発癌物質を含みます。
- 一酸化炭素：ヘモグロビンと結合し、細胞の酸欠状態をきたし、全身的な障害だけではなく、妊娠時の胎児への影響を認めます。

しかし深刻なのは、これらの有害物質が、主流煙よりも副流煙の方に多く含まれているという点です。

発癌関連物質

- ・ ニトロソアミン 52倍
- ・ ニトロピロリジン 27倍
- ・ メチルナフタレン 28倍
- ・ ナフチルアミン 39倍

纖毛細胞障害物質

- ・ フェノール 2.6倍
 - ・ アンモニア 73倍
- 主流煙がpH 6(弱酸性)に対し

- ③ 呼吸器疾患
受動喫煙は、乳幼児の気管支炎、急性肺炎、気管支喘息を誘発、重症化させ、非喫煙者の肺癌の危険度を20%増加させ、職場での受動喫煙は肺癌危険度を50%高め、常習喫煙者の夫と同居している妻の肺癌を喫煙量に比例して多くします。
- ④ 子宮頸癌
非喫煙女性の子宮頸部粘膜から

